

フィンランドの教育は、PISAの学力調査で好成績を取り続けていることで、近年国際的な注目を浴びてきた。筆者は、15年前から北欧の教育、とりわけスウェーデンの「ものづくり教科」（スロイド）に注目し、その歴史と現状を研究してきた（筆者研究室のHP参照）。フィンランドが世界で最初に（1866年から）小学校のカリキュラムのなかに、この教科を必修教科として導入したことは有名な事実である。おそらく、この教科がフィンランドのカリキュラムに根づいていることと、PISAの好成績の結果とは関連していると筆者は考えているが、このことを証明することは容易なことではない。本書は、このものづくり教科の目標や授業の様子をていねいに

紹介している点で、これまでのフィンランドの教育を紹介した多数の本に抜きん出ている。筆者がPISAの結果とこの教科との関連性があると考える理由を以下に述べておく。1866年にこの国は初等教育制度を発足させたが、手工科をそのカリキュラムの必修教科とすることに大きな影響を与えたのは、フィンランドの最初の師範学校（ユベスキュラ師範学校）のウノ・シグネウス校長だった。彼が、カリキュラムにこの教科を導入した背景には、肉体労働と精神労働との対立の克服というねらいがあっ

た。このことは、スウェーデンでスロイドの教員養成を世界で最初に始め（1878年）、モデル・シリーズという教材集をつくりあげて世界の手工科に大きな影響を与えたオットー・サロモンと、シグネウスとの往復書簡においてシグネウスが何度も主張していたことからわかる。このような考え方が、19世紀後半に激化した階級対立を融和させる考え方に由来していることも、先の往復書簡から読みとれる。北欧では、現在でも多くの人が自分の住居や別荘を改築・修理することが多い。ストックホルム大学の教育学の教授の別荘には、木工や金工の道具があり、その教授が自ら使っていた。こういう生活習慣は以前から長く続いてきたものである。北欧社会には、

自分の手で何でもつくろうとする精神が根づいている。そのことは、技能を大事にする思想とつながっているように思われる。技能を教えることは、人間

形成にとつて本質的なことである。シグネウスやサロモンはこのことを強調していた。

現代の日本でも、製造業で技能や技能者を大事にしない企業はやがてこの世界から消えていく運命にあることは多くの例が教えている。技術者と技能者が相互に尊重し合い、協力してものづくりに取り組んでいる企業だけが、グローバルな競争社会を生き残っていくだろう。技能の問題は、人間形成においても社会（経済）の発展においても大事なことである。このことが日本の学校教育の世界ではほとんど顧みられることはない。

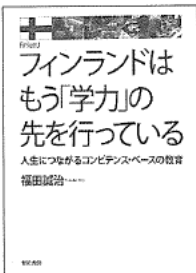
本書は、小・中学校でのものづくりの授業から、高等学校（本書では専門学校）、職業訓練センター、専門職大学（AMK）での職業教育・訓練まで、人の生涯にわたる職業能力形成（開発）のありようを紹介している点で、画期的である。日本の学校教育に根本的な疑問を持つ多くの方が、本書を読んで問題の本質を学んでいただきたいと強く願う次第である。

●フィンランドの「ゆとり教育」に学ぶ

福田誠治著

フィンランドはもう「学力」の先を行っている

—人生につながるコンピテンス・ベースの教育



四六判/208頁
亜紀書房
1680円（税込）

自分の手で何でもつくろうとする精神が根づいている。そのことは、技能を大事にする思想とつながっているように思われる。技能を教えることは、人間